

固視状態の検査 直接観察法(Visuscope: 固視標付直像鏡による方法)

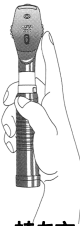
目的

眼底を直接見ることによる固視の状態の把握

準備物 Visuscope



斜視・弱視の診断検査法 P47



持ち方

通常健眼から始め、被検者の他眼を隠し、通常緑(青)色フィルター(羞明予防)を眼から離して被検者の側面から瞳孔中央に投影し、しばらくして散瞳したら光軸をずらさず Visuscope を近づけ、検査眼と同じ左右眼で眼底をのぞく

健眼で上手に検査できない場合、信頼性は低い。検査は無散瞳で可能だが被検者を散瞳させた方が正確にできる。被検者に前もって見える視標を理解させておくこと。

YES 眼底の血管が見え、白い針の穴の様な小さな反射が見えるか？

NO 慣れないうちは被検者自身の手で隠してもらい、片手で被検者の額を持って指幅分の検査距離を保つと良い。ただし、幼児はアイパッチなどで遮閉。

原因)

光量不足
(フィルター中止又は光量を増加)

ピント不足(血管がぼける)
(数字のダイヤルをかえる)

光軸のずれ・ワーキングディスタンス(最初からやり直し)

光量の増減はスイッチの0と1の間で!

理論上は、検査者の屈折度+被検者の屈折度+調節作用となり、被検眼が-3D、検眼が-1Dであれば-4Dのレンズと両者の調節を補正する-2Dを加え-6Dの補正レンズが必要。

能動的方法

Visuscope に内臓されている星印、又は同心円の視標の中心を見るように命じる

受動的方法(自覚的方法)

正面を向くように指示し、検者が視標を被検者の中心窩に他動的に重ねる

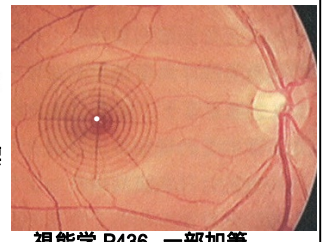
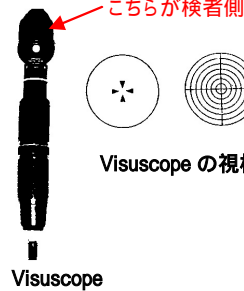
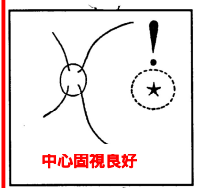
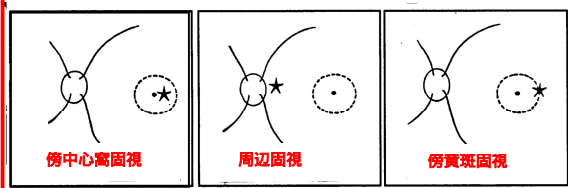
NO 眼底に投影されている視標が中心窩に位置しているか？

YES 正常者の変動幅を知り、特に健眼との比較が大切!

YES 重ねた視標が、真正面と感ずるか？

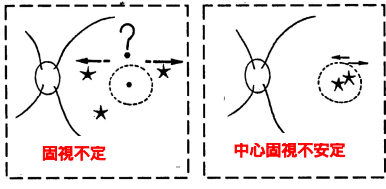
NO

固視状態の(位置による)分類



視能学 P436 一部加筆

斜視・弱視の診断検査法 P48 では下記も追加



星が見えるなら、どちらの方向へ見えるか、さらに星を見ようと指示した時の眼の動きも見ること。

偏心固視？
中心窩が主視方向を失っている？
中心窩の抑制？

偏心固視

ただし分類には追加は含まない。

中心固視

固視の静止状態からの分類

視能矯正学改定 第2版 P350・文章()の中は視能矯正マニュアル P200

- steady(安定) : きわめて安定している(安定している)
- unstable(動揺) : 固視点が不安定でどこにもないもの(固視点が動揺している)
- waving(微動) : ブラウン運動様に不規則に微動するもの(不規則に微動する)
- nystagmoid(眼振様) : 規則正しく水平方向に揺られるもの(規則正しく水平方向にゆれる)

さらに

注意を促すと、中心窩に向かう動きがあるか？

さらに

検者は視標をわずかに動かし、すぐに追従してくるか？

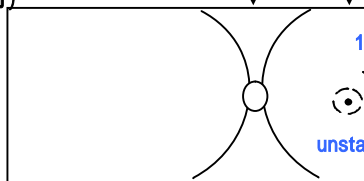
NO

固定した偏心固視

YES

確実な中心固視

結果・記載例)



眼底図を書き、時計の何時方向に何度偏位しているか記載する。偏心固視点の位置は目盛板を用いて度数を記載する。(目盛板の同心円は1/2度の幅である。)その他、固視の状態が安定か、不安定・動揺かのコメントを記載する。